

南京同文書院と佐々木四方志

原 田 和 広

サマリー：Yomoshi SASAKI was already forgotten name in the world of research about the Toa Dobun College. SASAKI was a doctor in Meiji period, and also was a member of the Toa Dobun Society when it first started. Because of his efforts, the Toa Dobun Society could open the Toa Dobun College at Nanjing in 1900. The purpose of this study is to make clear the works and contributions of Yomoshi SASAKI and his wife Haruo, and also to make clear the earliest shape of the Toa Dobun College.

佐々木四方志という名は東亜同文書院研究の世界では、既に忘れられたものである。彼は明治期の医師であるとともに東亜同文会の初期のメンバーであった。彼の尽力のおかげで東亜同文会は1900年に南京同文書院を開校することが出来たと言える。本研究においては佐々木四方志およびその妻・春尾の仕事と貢献を明らかにすることにより、東亜同文書院の初期の姿を浮かび上がらせる事を目的としたい。

キーワード：南京同文書院 (Nanjing Dobun College)

東亜同文会 (Toa Dobun Society)

佐々木四方志 (Sasaki Yomoshi)

佐々木春尾 (Sasaki Haruo)

近衛篤磨 (Konoe Atumaro)

1. はじめに

東亜同文書院に関する研究は数多く行われてきているが、創設期にあたる南京同文書院について書かれたものはあまり多くはない。南京同文書院に関連する研究の中では、南京同文書院の教員であった山田良政とその弟純三郎に関するものこそ一定数発表されているが、それらの論考の中心はやはり山田良政・純三郎兄弟の足跡と孫文との関わりであり、

南京同文書院に関することではない¹。目下のところ、南京同文書院について最も詳しいのは、まずは創立80周年記念誌と銘打って出された『東亜同文書院大学史』（滬友会、1982年5月）であろう。ここには南京時代の同文書院のことが8ページに渡って記述されている。他にまとまったものとしては、栗田尚弥『上海東亜同文書院』（新人物往来社、1993年12月）があり、ここでも一章を創設期の南京同文書院の記述にあてている。

この時代、南京に教育機関を創設するというのは、東亜同文会としても画期的なことであり、その創設には、関わった者たちの並々ならぬ努力があったものと推察される。しかし、多くの先行文献において、南京同文書院設置の立役者の一人として必ず名前が挙げられながらも、その実像がよく分からない人物がいる。それが本稿で取り上げる佐々木四方志（ささきよし）である。

佐々木四方志が具体的にはどのような人物であり、南京同文書院設立にあたって、どのような働きをしたかということについては、先述の先行文献の中では、その名は記載されども、ほとんど書かれてはいない。わずかに佐々木が軍医であり、東亜同文会の幹事であったこと等が記されるのみである。加えて、この中国動乱の時期に夫に帯同して日中交流に尽力した妻・春尾の働きについては、ほとんどの先行文献で触れられることはない。

しかし、後述するように、初期の南京同文書院の設立、殊に仮校舎として中国寺院・妙相庵を借り入れることが出来たのは、佐々木四方志の尽力があったからであり、南京同文書院の設立に際して、佐々木四方志の果たした役割はやはり大きなものであったと言わざるを得ない。

そこで本稿においては、佐々木四方志並びにその妻・春尾について調べ、知られざるその姿について、できる限り詳述することにした。本稿の情報によって、東亜同文書院史の初期の空白が埋められることができれば幸いである。

なお、本文中に用いた資料の旧漢字は全て常用漢字に直した。また、文中使用した資料における支那等の表現は、時代状況を勘案してそのまま用いた。

2. 佐々木四方志について

(1) 『東亜同文書院大学史』及び『対支回顧録』に見る佐々木四方志及びその妻・春尾

佐々木四方志という名は、東亜同文書院の創設期を取り上げる際には必ず出てくる。例えば先にあげた『東亜同文書院大学史』の中でも、教育機関設置を決めた同文会が明治32（1899）年9月に、「まず幹事佐々木四方志を現地調査のため上海に派遣した」と書かれている²。そして初期の教職員の陣容として、下記の名を挙げている³。

幹事	(医学士) 佐々木四方志
庶務・会計	中村兼善
法律・経済学	(文学士) 山口正一郎
時文・中国語	(舎監) 山田良政
英語	ブロックマン
中国語	王 鎮
漢 学	鄒宝霜

ここで佐々木四方志の名はトップに据えられている。院長の名が記されていないのは、初代院長として東亜同文会により選出された佐藤正が、本人が強く望んだにも関わらず、本人の体調不良、並びに軍人である佐藤の就任が中国側との軋轢を生む可能性を憂うとの意見のために、なかなか渡航することができなかったからである。後述するように、南京同文書院は実質的にはトップ不在のままスタートせざるを得ず、代わって佐々木四方志が現場を差配していたと推測される。しかし同書の中には、彼がどのような人物であったかということについては、ほとんど書かれていない。かろうじて「幹事の佐々木は医学士であったが、一説に陸軍二等軍医で、官命により二カ月の予定で上海に在留していたとある。後記の山田らの事に同調したため、三十三年十一月に辞任した」⁴とは書かれている。しかしなぜ陸軍の軍医が学校開設に関

わっていたのか、その理由は同書の中には明確には書かれていないのである。

このように、東亜同文会の出版物の中に佐々木四方志の名はしばしば登場するにも関わらず、その詳しいプロフィールはほとんど書かれていない。例えば、「明治初年以降最近に至る対支功労者の事績を蒐録した」⁵ものとされる『対支回顧録』、『続対支回顧録』は、明治から昭和初期の日中交流に尽力した人物について、東亜同文会を中心に網羅的に集め、紹介したものであるが、そこにも佐々木四方志の名は無いのである。

ところが不思議なことに、夫・四方志の名は無いのに、その妻・春尾についての記載は、約2ページに渡って載っているのである。この回顧録、続編も含めれば二冊になる回顧録烈士伝には、全体で1045名の人物が掲載されているが、そのうち女性はわずか6名しかいない。後述するように、春尾が中国と関わりを持ったのは、彼女とその夫が南京同文書院創設のために奔走した間だけのことであるから、東亜同文会が彼女を『対支回顧録』の中で取り上げたのは、やはり南京同文書院設立期にあたっての、佐々木夫妻の働きが大きかったことを高く評価してのことなのであろう。同書の中で春尾は「我が婦道の鑑」と称えられている。

以下、同書での記載に従って、春尾の経歴を簡単になぞっておく。彼女は長野県下伊那郡会地村出身（夫と同郷）で、陸軍大尉の長女として明治12（1879）年11月に生まれた。父親の石黒大尉は鴨緑江渡河戦に参加し、海城県三台子で戦死した。後、同郷の佐々木四方志と結婚。中国赴任の決まった佐々木四方志は単身先行して渡航し、懐妊中の春尾のことは上海に居る留学生・岡野増次郎に世話を依頼した。

明治32（1899）年10月に春尾は上海に到着し、留学生・曾根原千代三と南京に赴き、城内復成倉の劉公館を借りて住み、夫と共に中

国語の学習に勤めた。その習熟は夫も及ばないほどであり、日常に不便が無いようになり、洋務局総弁・汪嘉棠の家人と交際し、夫の業務を裏面より支えたという。当時南京に在住していた邦人は二十七名いたが、その中唯一の女性としてよくその世話をしたと伝えられている。

南京在住中に夫の医者としての名声が中国側に伝わり、多くの患者が押し寄せる中、長江水師提督・李占椿（海軍大将）が病臥したのを夫とともに介抱し、快癒させたのを機に、夫人の名は夫とともに高まったという。

のち義和団の乱の際に佐々木四方志は福本日南等と革命の事に従ったので、夫人は分かれて帰朝。その後、夫が志を得ずして帰朝した後は、まずは滋賀県八幡町（筆者注：実際には岐阜県郡上八幡町）に、その後青森県弘前病院長として弘前に赴任（筆者注：弘前病院院長として赴任したとあるが、その事実は確認されなかった）。明治40（1907）年夫が朝鮮の病院に奉職するとこれに従い、内助の功をしめした。

佐々木夫妻には、四男一女があり、長子建業は医学士にして朝鮮総督府鉄道病院医員として奉職、春尾は病を得て昭和3（1928）年に京城（現ソウル）にて永眠した（享年50歳）。生前春尾は佐々木信綱に就いて和歌を学び、多くの歌を残した。

この時期、日本女性の海外渡航は言うまでもなく稀であり、ましてや在留邦人の少ない南京の地に妊娠中にも関わらず赴き、清国高官の家族と親しく付き合い、大いに夫の仕事を助けた春尾は、確かに「我が婦道の鑑」と称えられてもおかしくは無い。春尾の名は、当時の在留邦人の間でも知られていたようで、例えば『南京日本居留民誌』の中では次のように紹介されている⁶。

春尾女史は在留民中唯一の女性として在留民の世話方となり、また時の総督劉坤

一洋務局総弁汪嘉棠等の家人と交際し間接に夫君の事業を援助せるは、西村天因氏の在留邦人の首脳者として、支那文武大官と親しく往復し、日支両国人間の楔子たりしと好一対なりとす。

明治・大正期に活躍した小説家・ジャーナリストである西村天因は、大阪朝日新聞社の記者として、日清戦争に従軍記者として参加した後、南京に留学し、漢籍の蒐集を行いながら、記事を日本に送っていた。春尾は中国の高官一家と親しく交わる他、西村のような文化人とも交流し、夫の仕事を支えていたのである。

ちなみに南京渡航時に春尾は懐妊しており、12月16日に小田切領事が南京に打ち合わせに来たときには長男を出産していた。長男は南京の古称である建業と名付けられた。

(2) 中国渡航までの佐々木四方志

では、改めて佐々木四方志のプロフィールを、まずは南京に行くまでについて簡単にまとめておくことにする。

佐々木四方志は明治元年（1868）年5月に長野県下伊那郡会地村十八番地（現在の阿智村駒場）に生まれた。父・享は同村で医者をしており、佐々木四方志はその長男であった⁷。年の離れた弟に積（つもる）⁸がおり、積が生まれた明治19（1886）年時点においては、一家は阿智村曾山277番屋敷に住んでいた。⁹

『阿智村誌』¹⁰での記載によれば、もともと佐々木家は近江の国の細江の庄で武士をしていたが、天文年間（1530年代頃）に戦禍に遭い、一族郎党引き連れ、会地村曾山まで落ち延び、その後ここで百姓として生きてきたと伝えられている。佐々木四方志の家はこの周辺の佐々木家の本家筋にあたり、四方志でちょうど22代目にあたるという¹¹。佐々木家の屋号は家紋に由来して「四つ目屋」であり、

この家紋は近江八幡市の安土町にある沙沙貴神社のものと同じである。

駒場村下町の宗門改帳（文久三年=1863）には、弘化年間前後（1840～1850）ころの先祖が駒場村や近隣の大野・昼神で寺子屋の師匠をしていたことが記されている¹²。この集落では、本家筋の佐々木家が代々寺子屋を開くことになっていたようであり、その名残からか、享も駒場上町で医者をする一方で明治7（1874）年～明治17（1884）年の間、駒場学校の教師をしている。佐々木四方志も幼年期はここに学んだのであろう。佐々木四方志自身、明治12（1880）年～明治14（1882）年と明治16（1883）年～明治17（1884）年の間、2回にわたって父・享と同じように駒場学校の教師をしていた¹³。このような経歴は、後に四方志が教育機関創設に関わりを持つようになる遠因となったのではないだろうか。

その後、明治の中頃一家は東京に転居する。佐々木四方志は第一高等中学の予科を経て明治21（1888）年9月に本科へ入り、明治23（1890）年7月に卒業した。高等中学卒業時点で年齢はすでに23歳になっていた。そして卒業と同年の9月に、帝国大学医科大学（のちの東京帝国大学医学部）に入り、明治27（1894）年7月に無事卒業し、医者となった。この頃は、医科大学を出て申請をすれば医者になることができたのである。

卒業時の佐々木四方志の成績はかなり優秀であり、卒業時の順位は3番であった¹⁴。この頃の慣例に従えば、官費留学生に選ばれてもおかしくない¹⁵。にもかかわらず詳しい事情は分からないが、佐々木四方志は官費留学生に選ばれることはなく、明治28（1895）年1月15日に軍医に任官する。同年7月19日付の『官報』には、陸軍三等軍医として東京衛戍病院に赴任していることが記されている。けれどおそらく海外に留学したいという夢が燻り続けていたからか、或いは当時の慣例からか、後に中国に渡るにあたり、佐々木四方

志は私費留学という形式を取った¹⁶。

(3) 中国に渡るきっかけ ～青山胤通・岸田吟香との関わり～

以上見てきたように、佐々木四方志という人物は、地方の素封家の家に生まれ、その家業である医師を目指して東京に出、当時の最高学府である帝国大学医科大学に学び、やがて軍医となった。明治の学歴エリートと言っても良く、優秀な人物であったことに疑いは無い。しかし、ここまで見てきたように、中国に関わる箇所は一切無く、彼がなぜ南京同文書院の設立に関わることとなったのかという事は、彼のプロフィールからだけではうかがい知れない。

佐々木四方志を中国、具体的には東亜同文会・南京同文書院へとつなげたものは何だったのか。『対支回顧録』の佐々木春尾の項目では、直接的な理由は分からない。予備役二等軍医の頃、既に対中国支援を志したとされているが¹⁷、具体的に佐々木四方志を東亜同文会へと導いた人物として、ここでは青山胤通と岸田吟香の名をあげたい。

まず青山胤通（1859—1917）である。周知のように彼は明治を代表する西洋医であり、明治天皇の侍医、宮内庁の御用掛をつとめた人物である。青山は東亜同文会の代表を務めていた近衛篤磨の信頼も厚く、『近衛篤磨日記』には、近衛篤磨がたびたび青山のもとを訪れ、治療を受けていたとの記載がある。いわば、近衛篤磨の主治医といっても良い人物であった。青山胤通は明治20（1887）年にドイツ留学から帰国すると、帝国大学医学部内科の教授となった。佐々木四方志の専門も内科であるから、佐々木四方志は青山胤通の帝大での直接の教え子ということになる。以上のことから、近衛篤磨に佐々木四方志を紹介したのは、おそらく青山胤通ではなかったかと推察される。

ではなぜ青山胤通が教え子である佐々木

四方志を近衛篤磨に紹介する必要があったのか。おそらくそこには岸田吟香（1833—1905）の要請があったためと思われる。明治を代表するジャーナリストにして実業家の岸田吟香が、この時期中国、ひいては東亜同文会と深いつながりを持っていたことは周知のことである。明治31（1898）年11月2日に東亜同文会が組織されると、岸田吟香は参画し、評議員となった¹⁸。

吟香の一生を記した草地浩典『岸田吟香雑録』によると、岸田吟香は生涯で8回中国に渡っている¹⁹。

- ① 慶応2年（1866）年33歳、「和英語林集成」の印刷をするためヘボン夫妻とともに横浜から上海に向かった。
- ② 慶応4（1868）年35歳、汽船を買うために上海に行く。精錡水の取引所を設けた。
- ③ 明治13（1880）年47歳、精錡水の販売を広めるため上海に楽善堂上海支店を開設した。訓盲院に2人入学し授業が開始された。
- ④ 明治15（1882）年49歳、榎本駐清公使、上海楽善堂を訪ね吟香を称賛する。清の官吏登用試験用の袖珍本を出版、販売し利益を得た。
- ⑤ 明治16（1883）年50歳、蘇州に楽善堂の支店を開き書籍、薬草を売る。
- ⑥ 明治18（1885）年52歳、滞在中、次男、艾生がうまれた。
- ⑦ 明治19（1886）年53歳、荒尾精が吟香を訪ねた（2月頃）。
- ⑧ 明治21（1888）年55歳、清の文化人に呼びかけ玉蘭吟社を設立。上海に1年ほど住んだ。

ここにあるように、吟香は上海で日清貿易研究所の荒尾精とも関係を持った。東亜同文会側の資料『対支回顧録』下巻の岸田吟香の

項目では、吟香が近衛篤磨等とも親交を持ち、自ら日中貿易に従事するだけでなく、荒尾精等草創期の志士たちに尽力し、東亜同文会や同仁会等の有力な支援者であったことを讃え、次のように続けている。²⁰ (傍線は筆者による)

更に転じて君の支那に対する医業を記述せねばならぬ。樂善堂が精錡水、即効紙、宝丹其他の日本薬を弘布して衛生に資した半面、君は衛生宝函を発行して衛生思想の普及に尽くし西洋医術の紹介に努めた。財団法人同仁会の結成は固より君独力の提唱ではないが、少なくとも君が主唱したるの功は之を認めねばならぬ。博士青山胤通等と交遊して我が刀圭界に同仁会結成の氣運を醸成し、大隈侯等と企画し、遂に之が創立を見たのは明治35年6月であるが、其の發起人会乃至創立準備委員会の必ず君の名を逸したることはなかった。(中略)

又、支那に在つて阿片吸飲の害を目撃した君は、其の害毒が全国的に及ぶのを大いに憂慮し、医学士佐々木四方志に託して之が治療の方法を研究せしむると共に、支那各地に阿片患者のために、阿片病院を建設せんとし、画策頗る努めた。

ここに記したように、中国と行き来する中から、阿片吸飲の害を目撃した岸田吟香は、中国に対する医学方面での支援に特に力を入れ、青山胤通、そして佐々木四方志と協力しながら、中国における阿片の害毒の撲滅に努めたのである。

佐々木四方志が中国に初めて行ったのは、東亜同文会設立の翌年、明治32(1899)年のことである。同年3月に東亜同文会の役員が改組された際に佐々木四方志は同会幹事になり、この年の7月に現地調査のため福州に行くことが決定した。3月5日には、近衛篤磨

宅で行われた幹事会に出席している²¹。

そして佐々木四方志は同年9月に清国へ渡った。先述したように、この間陸軍には清国留学につき、二年間を休職すると申請しており、佐々木四方志は留学費用を陸軍に収めている。(後、帰国に伴い、私費留学差し止めの願いも出されている)。

このようにして、一介の医者にすぎなかった佐々木四方志は、東亜同文会と関わりを持つようになり、中国に派遣されるに到った。しかしながら、この時点における派遣の目的は、岸田吟香の意向を組み、病院建設を目的としたものであったのである。

それがいつから学校開設の方向へと転換したのか。『近衛篤磨日記』の明治33(1900)年4月5日の項目に、佐藤正の談として「佐々木は病院建設の為に赴いて、傍ら学校の設備にも尽力せよと依頼した」とあるので、当初は阿片治療の病院建設の為に中国に赴いていた佐々木四方志に、学校関連業務を一時的に依頼したということであったように思われる。しかし後述するように、近衛篤磨の外遊をきっかけとして、佐々木四方志は居住地も南京へと移し、南京同文書院の開設に邁進するようになるのである。

3. 南京同文書院設立にむけて

(1) 南京同文書院設置の構想

東亜同文会はその設立の当時より、海外に学校を創り、日本人留学生を派遣することに意欲的であった。学校設立に到る経緯について、『東亜同文書院大学史』では次のように書かれている²²。

東亜同文会は、その成立の翌明治32年(1899)3月に春季大会を開催し、当面の具体的な事業計画を策定したが、その一項目として漢口(のち上海に変更)・広東に留学生を派遣することを決定した。

これに基づき志願者20余名について考査の結果、上海には岡野増次郎・曾根原千代三・山田純三郎・宇野海作・上田賢象・井手友喜・牛島吉郎の七名を、広東には、橋本金次・内田長二郎・熊沢純之介・山下稲三郎・松岡好一・遠藤隆夫の六名を派遣することとなり、各留学生は九月までに相次いで現地に到着し、それぞれ上海支部長井手三郎、広東支部長高橋謙の監督の下に勉学を開始した。

前記の留学生の派遣は、三年間主として語学(上海は北京官話、広東は広東語)を学び、習得後は在清各支部に勤務して会の事業を担当させることを目的としたものに過ぎなかったもので、まもなく、大規模な学校を清国中央の政治的要衝である南京に開設し、広く大陸で活躍し得る人材を養成すべきであるとの意見が抬頭した。近衛会長を始め同文会には、この種の教育機関開設に熱意を持った会員が多かったから、この企画は期せずして会の方針となって急速に進展し、同年九月、まず幹事佐々木四方志を現地調査のため上海に派遣した。

東亜同文会が学校設立地と定めた南京には、当時既に東本願寺が経営する金陵東文学堂があった。南京の立地、その文化的背景を見ても、南京というこの江南の要地に、東亜同文会が同じように学校設立を考えるのは、ごく自然なことだった²³。

(2) 近衛篤磨と劉坤一の会見

東亜同文会内で南京において同文学堂を設立する案が浮上するのと同じくして、折りからの近衛篤磨洋行に伴い、近衛篤磨自ら学校設立に関して中国側に要望を行うことが決まった。『近衛篤磨日記』には、明治32(1899)年4月1日以降欧米各国を巡遊中であった近衛篤磨が、この本部の意向を受けて、帰途上

海に寄港し、10月29日南京に両江総督劉坤一を訪問したことが記されている。篤磨が「東亜同文会の趣旨を述べ、今回南京にも学校を設くるの考えあれば、万事に相当の便宜を与えられんことを望む」と要望したところ、劉総督は「同会の事をすでに聞知して貴邦の厚誼に感じおれり。学校を南京に設けらるる事のごときは、及ぶだけの便宜を与ふべし」と快諾したとある²⁴。南京同文書院開設が本格化したのは、まさにこの近衛篤磨・劉坤一の会見がきっかけであり、ここで劉坤一の言質を得ることに成功したことが、南京同文書院開設の決定的要因となったと言える。

そしてこの会見に同席し、中国側との折衝にあたった要員の一人こそが、佐々木四方志だった²⁵。近衛篤磨が外遊途中に上海に寄るとの知らせを受けた佐々木四方志は、中国側と折衝する係に任せられ、上海へ呼び寄せられた。この時佐々木四方志は、先述のように病院設立を主たる目的に中国におり、そのついでとして学校設立の調査にあっていた。『近衛篤磨日記』の明治32(1899)年10月27日の項目には次のようにある。²⁶(傍線は筆者による。)

一 午前十時出寓、正金銀行全面より大東洋行の小蒸気に乗じ、申江(黄浦江共云ふ長江に接する運河にして春申君の開墾せしものなりとの説あり)を上る。十一時を過ぎて江南製造局に至る。(中略)又英語通訳官の案内にて、銃砲製作所、弾丸製作所、製煉所等を見る(火薬製造所等は暇なくして見ざりし)。辞して船に帰り、直ぐに下りて英租界にて上陸、次に大東洋行、同文会上海市部員の案内にて、支那流刺烹店聚豊園に至り午食す。我一行(小原は所用あり赴かざりし)の外、主人側にて白岩、井出、陪席として宗方、高橋、佐々木四方志、小室三吉、小田貴雄等なり(中略)。

(8)

南京同文書院と佐々木四方志

一 午後七時松村領事代理の催ふしにより、前道台蔡鈞、現道台余聯沅を余に紹介するの宴を領事館に開く。列席、我一行の外館員、其他二三の人々なり（余道台の通訳官某も来る）。（中略）其後談話十一時半に及び、同席者の外、永井、伊吹山兩人等と「ジャデン・マゼラン」会社の瑞和号に乗船す。船にも見送りの人多し。暫時にして皆去り、船に止まるもの九人、我一行の外宗方、藤原銀太郎（三井にて今飯漢口に支店を開くに付き今回を好期なりとし同人を派遣せしむるなり）清藤は漢口迄、井出、白岩、佐々木等は南京迄、同行する筈也。（後略）

この記述にあるように、上海に着いた篤磨は、上海にて銃砲製作所、弾丸製作所、製煉所等を見学、佐々木四方志は同文会の一員としてその視察の道程に付き添っている。そしてその後白岩竜平・井手友喜とともに篤磨を南京に案内するのである。一行は同年10月29日に船で南京に到着した。以下に南京到着後の一行の様子を記しておく。²⁷

一 午前三時半南京に着、直に上陸す。瑞艇の混雑名状すべからず。道台より差廻はされたる一官吏出迎ふ。外に本願寺（東派）出張所の一柳□□（不記）外両三名、三井組の留学生等もあり。海岸の船積問屋なる一室に小憩し、夫より道台の廻されし馬車にて一同海岸を發し、下関に至る比、天既に明らかなり。道路は日清戦役中、張之洞の当省総督兼務中に竣工したるものなりといふ。坦々□（不記）の如く、支那には珍しき道路なり。これを過ぎて第一の関門あり、又進む事半時間、第二の関門に達す。六時半過ぎ南京の市街に達し、先づ本願寺出張所に入る。少時休息す。其間に井出、宗方、白岩、佐々木等は洋務局に至り（洋務局

は当省外人、応接の官衙なり）、総督と会見の事等を打合わす。（後略）

先述したように、この日篤磨は劉坤一と会見、南京同文書院開設の言質を得た。もっともこの時の会見は、極めて短いもので、その後佐々木四方志は白岩等と共に南京に二三日滞在し、再び劉総督に面会し、白岩が内田嘉吉の通訳者として更に話を詰めた²⁸。この会見を記念して、後に篤磨は四方志を通じて劉総統の揮毫を受け取り、「頗る見事の出来なり」²⁹と述べている。

(3) 近衛篤磨と佐々木四方志

南京を後にした近衛篤磨は、張之洞を訪ねて武昌を訪れた後、11月7日に上海に戻ったが、「鬪の膨張に艱やみし故」佐々木四方志の診察を乞い、「二か所切開せしめ」ている。長きにわたる外遊の疲れもあったのかもしれない。佐々木四方志は、外遊中の主治医としてもその役割を果たした。『近衛篤磨日記』での記載を見ると、この件の後から、両者の仲は急速に近づいたように見える。帰国の前に篤磨は蘇州・杭州に遊ぶのであるが、佐々木四方志は一貫して篤磨に同行している。次に挙げるのは、同年11月14日の記載である。

一 午後五時、杭州域外拱宸橋に接す。領事代理速水一孔、日本人会総代轟木長、陸軍大尉斎藤季治郎（武備学堂総教務）外数名出迎ふ。夫より上陸、直に我専管居留地を一覧す。其状況蘇州に異ならず。夫より大東洋行支店に投宿す。他の人々は皆船に帰りて眠る。今夕晩食の際、戯れに我一行に支那流の姓名を附したり。又旅中の一興なりし。

近衛 康錫珊（公爵様）

大内 呉瑞光（御隨行）

白岩 晋渾（新婚なればなり）

牧 晋文也（新聞屋通信員なれば也）

御酒本 邵梅仁（商売人）
 香月 翁虞雷（一行中の健啖家なり）
 佐々木 王維謝（御医者という事也）
 外に速水は領事代理なれば梁時大の名を
 附し、杭州滞留中は互にこれと呼ぶ事と
 し、為に笑声絶へざりし。³⁰

このように杭州の旅に遊んだ一行は、寛いだ様子で、お互いを戯れにつけたニックネームで呼んでいる。一軍医にすぎない佐々木四方志にとって、五摂家筆頭の近衛篤磨と親しく接することができたことは、まさに夢のようなひと時であったにちがいない。

4. 佐々木四方志と南京同文書院

(1) 開設当時の南京同文書院～佐々木四方志と山口正一郎との対立～

以上見てきたように、佐々木四方志は近衛篤磨の中国滞在中一貫して行動を共にし、深い信頼を得ている。時に近衛篤磨の診察も行い、中国滞在中の主治医のような役割を担いながら個人的にも親しくなっていた。このように近衛篤磨の信任を得た佐々木四方志は、南京同文書院設立の責任者として邁進していくことになるのである。

11月末に篤磨が帰国の途についての見届けた佐々木四方志は、同年12月、留学生曾根原を帯同して、南京に行き、小田切領事とともに南京同文書院設置について奔走した³¹。同じころ妻・春尾も日本から南京に渡っている。身重の妻をわざわざ呼び寄せるあたり、四方志がこの仕事を一時的なものとは考えておらず、本腰を入れて事にあたっていたことがうかがえる。

南京同文書院は、翌年1月には、数人の日本人留学生と秦淮河に沿った復成倉の劉公館を仮校舎にして授業を開始した。そして5月に正式に中国寺院の妙相庵を借り受け、開院式を取り行い、ここで南京同文書院が本格的

に始まることとなった³²。南京同文書院の具体的な場所については、稿を改めて詳述する予定であるが、この妙相庵は南京のほぼ中央部にあり、鼓楼のすぐ南にあった。場所の良さからいくつかの学校がこの場所に学校を建設したことが知られている。

この妙相庵を南京同文書院の設立場所に借り受ける経緯については明らかになっていないが、『対支回顧録』下巻の佐藤正の記述の中に少しだけこの辺のことが載っている。³³

而して是より先学堂建設の事が決定するや、同文会は其の上海留学生に対し南京に移らしめ、佐々木四方志の尽力によって借入たる妙相庵を仮校舎とし、山口教頭等の着任を機として、此に南京同文書院の看板は掲げられたのであつた。

ここからもわかるように、仮校舎となった妙相庵を探し出し、借りる大きな決め手となったのは佐々木四方志だったのである。その背景としては、先の佐々木春尾のところで述べたように、佐々木四方志が医師として中国側にかかなり信用されていたということ、かつ、妻・春尾の気遣いやコミュニケーション能力がすぐれていて、洋務局総弁・汪嘉棠らの家人と親しく交流していたこと³⁴等があったと考えられる。

かくして開設にこぎつけた南京同文書院であったが、すべてが順調というわけにはいかなかった。まず院長に任じられたのは、東亜同文会の幹事長であり、退役の陸軍少将であった佐藤正であったが、本人が渡航を強く望んだにも関わらず、体調が思わしくなく、また会の中にも軍人である佐藤の就任が中国側との軋轢を生む可能性を憂うとの意見があり、渡航することができず³⁵、南京同文書院開校の翌月、つまり明治33（1900）年6月には佐藤は辞任を余儀なくされ、二代目院長根津一が就任している。根津一は明治33（1900）

年5月に東亜同文会に入会し、評議員となり、二代目院長に就任し、同月末に南京に渡るも、7月には一旦帰国している³⁶。つまり南京同文書院は、開校前後一貫して院長が不在の 때가多く、実質的に院長の任を担ったのが、佐々木四方志であったのである。

しかし南京時代の同文書院は教授陣も整わず、校舎も仮住まいであり、学生たちにとってもなかなか満足のいくものではなかった。加えて、教師でも無く、院長でも無い佐々木四方志に統括されることに反旗を翻す人物もあった。その筆頭が、派遣教師である山口正一郎である。

佐々木と山口の対立に関しては、日本側でも問題視されていたようで、『近衛篤磨日記』の4月2日の項目には次のように記されている。(傍線は筆者による。)³⁷

一 今朝堀内大尉の来意は、佐藤正氏の依頼によりてなり、佐藤氏病気の為自ら来る事能はず、然も其全癒を待つ可らず、故に大尉を勞せし也との事。其話は同文会幹事長を辞したしと云うにあり。蓋し南京同文学堂の事、会長より全権を委任せられ乍ら、病痾の為其責を尽くす事能はず、派遣したる山口正一郎は佐々木等と衝突し、四方の攻撃山口の一身に集まり、其真情を究めずして檻りに山口をのみ攻むるに至る。其責は氏自ら当たらざる可らず。又会中閥族の競争、党派の睥睨ありて、非才之を統御するの力なし。故に此時を以て会の重職を退きたしと云にあり。余は他人を経由して如此論弁を為すは、往々誤謬に陥る虞あり、不日面晤を期して詳細は述ぶべし。然れども佐藤氏の言によるに、氏の誤解尠なからざるが如し。同文学堂の事は、何の設備もなくして荏苒日を経るは会の対面に関する。事務員の衝突の如きは可成速やかに処分せざる可らず。然るに氏は病痾に在

り、醫師は他人の面談を禁ずるが如き事に於て、其処分を氏に迫るは為す可らざるの事たり。然れども余にして独断せんか、前日氏に全権を委任したるの言に背くなり。故に余は之を取えてせざりし。蓋し佐藤氏が、南京事業に対する責任を当分解かれたしとの申出を待ちしなり。然るに今に至りて幹事長を辞せんとするは、其意を解するに苦しむなり。又党派閥族の事の如き事は、余も亦佐藤氏と共に進歩派臭味の者と誤解せられつゝあるも、今日に起こりし事に非ず。此の如き事は、其誤解を去らしむる事に尽力せば足れり。(後略)

同年4月5日に篤磨は病床にある佐藤正を訪問し、この件について話しあっている。

一 佐藤正を訪問す。病氣稍や快方にして、一兩日中には參上せんと欲せし処なりしといへり(門前にて谷子に面会す)。余は過日堀内に告げし理由によりて、南京の事業より手を退く事ならばいざ知らず、幹事長をも併せて辞するは穩当ならずとて留任を勧告す。佐藤は其好意を謝すると同時に、本人が同文会中のある一部の人より嫌忌せられて、百万其排斥を蒙り居る事を告げたり。当初余は信じたり、これを佐藤の邪推なりと。而して其詳細を聴くに及んで、其事の全く虚ならざるを確かめたり。南京の確執は、畢竟佐藤が佐々木は病院建設の為に赴きて、側はら学校の設備にも尽力せよと依頼したる迄なり。故に山口と衝突するべき筈はなきなり。其衝突したるは寧ろ不思議の感なき能はず。如此事柄なれば其確執は左まで解くに難からざるべし。独り内地に於ける幹事等の行為は頗る穩当を欠くものありとて、幹事中の一人たる国友の為に衆幹事は籠絡せられつゝありとの

事、国友の背面に佐々友房ありて自分の排斥を指簇しある事等を述べて、如此き場合自分の会にあるは円滑を欠き、会の対面上にも面白からぬ如き事を惹起すの惧あり。³⁸

実は山口正一郎は単に教師として派遣されただけではなく、教頭としての役割を依頼されていた。『対支回顧録』下巻の佐藤正の項には、佐藤が広島で認めて、山口正一郎に持参させた佐々木四方志宛の書簡の一節に、「此度山口氏渡清セラレ候間、万事御聴取可被下、山口氏ヲ以テ教頭トシ、且ツ小生渡清スル迄ハ兼校長ヲ委嘱シ置候間、万事御協力之程相願候云々」というくだりのあったことが記されている³⁹。

以上のことから、佐々木四方志と山口正一郎の対立というのは、南京同文書院の主導権争いということになるのかと思われる。日本から派遣されてきたばかりで、院長不在の中教頭として手腕を振るうつもりであった山口と、現地の事情に通じており、開校の功労者の佐々木四方志との間では、万事において見解の相違が生じていたのであろう。

(2) 孫文の惠州蜂起への関与

加えて、孫文の惠州蜂起への書院生の関与という問題が起きた。周知のように、南京同文書院は開院したものの義和団の乱による治安の悪化で、8月20日には上海へ引き上げざるを得なくなっている。佐々木四方志も南京同文書院関連の業務から離れ、明治33(1900)年8月に帰国することになった。「東亜同文会第十一回報告」(明治33年9月)には、山田良政とともに、その任を離れたことが公表されている。

しかしながら、佐々木四方志が同文書院の仕事から離れ、帰国することになった原因には、義和団の乱による混乱よりも、第一に先に上げたように、同文書院教授・山口正一郎

との不和に代表されるように、学院の中を十分に管理しきれなかったこと、そして第二に福本誠(日南)に同調し、山田良政等とともに孫文の革命に参加しようとしたことが問題視されたことがあった。

孫文の惠州蜂起と書院生の関与についての経緯を簡単にまとめると次のようになる。

孫文の惠州蜂起とは、清朝末期、1900年3月に義和団の乱が勃発し、戦火が北清一帯に拡大し、列国の軍隊と衝突する形勢となる中、孫文の一派が時局の混乱に乗じて広東に革命の烽火を挙げようとした計画のことである⁴⁰。

周知のように、この蜂起は失敗に終わり、これに参画した山田良政は行方不明となり、後死亡したことが確認されるが、書院生を先導した福本誠に同調したのは、山田良政だけではなかった。この辺のいきさつについて、『続対支回顧録』下巻の田鍋安之助の項目では次のように書かれている⁴¹。

一方南京同文書院は三十三年三月開院式を挙げ、院長根津一は赴任後間もなく書院拡張案を挙げて帰朝したが、其の不在中北方の義和団事件と前後して、南方では孫文等革命派の策動頻りに行はれ、孫文が広東に於いて革命の烽火を掲ぐるの計画ありとの報が、流布さるゝに及び、血気に逸る書院の職員学生等の多くは悉くこれに共鳴して、その渦中に投ぜんとする気配が見えたので、同文会に於ても打棄てて置けず、同年八月君(筆者注：田鍋安之助のこと)を南京に派して監督に当たらせる事となつた。

栗田尚弥は、南京同文書院の経営は、「東亜同文会第一着手ノ事業」とされた教育事業の内でも最も重視された事業であり、〈文化事業重点主義〉の核であったため、「福本ら旧東亜会系はこの南京同文書院を中国革命の

ための一大義兵集団に変身させることを企てた」としている⁴²。

福本等がどのように書院生を先導したのかということについての詳細は分からないが、「書院の職員学生等の多くは悉くこれに共鳴」とあるので、佐々木四方志もまたこれに共鳴していた一員であると推察される。実際、佐々木四方志は帰国してすぐの明治33(1900)年8月23日、近衛篤磨と面談した際に、「福本等の陰謀」に関係せし事を自白している⁴³。佐々木四方志は、福本日南や同僚の山田良政の影響で、惠州蜂起に学生たちと参加を考えていたが、山田良政には同行せず、日本に帰国した。おそらくは、南京にまで帯同し、内助の功を尽くしてくれた春尾や生まれたばかりの息子・建業のことを思っていることであろう。『近衛篤磨日記』での記述から推測するに、佐々木四方志解任の最大の要因は、やはり惠州蜂起に関わる書院内の混乱を収めきれなかったということによるのだと思われる。

次に佐々木四方志が近衛篤磨に会うのは、明治34(1901)年12月27日のことである。青森県に赴任するにための暇乞いの為であった⁴⁴。このようにして、佐々木四方志は心血を注いだ南京同文書院の仕事だけではなく、中国に関わることの一切から手を引くことになるのである。いわば、南京同文書院内の混乱の一切の責任を取ったということになるのだろう。明治33(1900)年9月25日付の『東亜同文会第十一回報告』には、「本会の依頼により南京同文書院の創立の任に当たりて熱心尽力せられ創立後は教授其他諸般の事務に執筆せられたる山田良政佐々木四方志の両氏は今回其の任務を辞退せられたり」(pp. 1)との記載がある。この日を以て、佐々木四方志と南京同文書院の繋がりは、完全に断たれてしまうのである。

5. おわりに

東亜同文会の仕事から離れた佐々木四方志は、医療関係者によって構成される同仁会に活動の場を移した。同仁会は東亜同文会関係の人士を中心に、医療関係の人々を加えて、明治35(1902)年初頭にできた東亜同文医会をその発端とするものである。

同仁会参加後の佐々木四方志の経歴をわかる範囲でたどり、本論の終わりとしたい。

南京から帰国した後、佐々木四方志は明治37、38(1904、1905)年頃は大阪予備病院附属の一等軍医をつとめる傍ら、明治39(1906)年には同仁会の評議員となり、大隈重信第二会長時代には、京城の大韓病院(後のソウル大学病院)へ派遣されている⁴⁵。『同仁会三十年史』には、「廣濟医院を改善し之を一般公衆衛生機関と為従事」⁴⁶とある。これ以降佐々木四方志は主に朝鮮半島で医療活動に従事し続け、明治40(1907)年朝鮮統監府鉄道病院に奉職。明治41(1908)年大韓医院衛生部長、明治45(1912)年頃龍山同仁医院院長を勤めている。大正10(1921)年には、京都帝国大学大学院より医学博士号(内科)を授与された⁴⁷。また、昭和元(1926)年に龍山鉄道病院を退職した後は、青葉町2丁目に隠居。昭和14(1939)年群山に転居し、昭和18(1943)年1月5日に群山で亡くなったという⁴⁸。

南京同文書院が存在した時期は短く、明治33(1900)年1月より寄宿舎を兼ねていた復成倉の劉公館の仮校舎の部分を考慮しても約8か月にすぎない。この8か月の間に南京で何があったのか。そして、なぜ上海に移転しなければならなかったのかという問題は、いまだ不明な点が多く残されている。

しかしここまで見てきたように、曲がりなりにも南京同文書院が開設にこぎつけることができたのは、佐々木四方志及び妻・春尾の存在があつたのことだと言える。おそらくそ

れは、佐々木四方志が優れた医者であったためであろう。佐々木四方志の医者としての能力が、中国の人々の信頼を得ることに役立ったのである。加えて、春尾の日本女性としての気遣いやコミュニケーション能力、ひょっとすると生まれたばかりの長子・建業の存在もまた、目に見えない求心力を発揮し、中国の人々の同意を得ることにつながっていたのかもしれない。

南京同文書院は、南京にはわずか3カ月しか存在しなかった。そして、明治33(1900)年8月に上海に移転し、翌年5月に名も東亜同文書院と改めることとなる⁴⁹。しかし、その基盤となったところに南京時代の同文書院があったこと、設立のために貢献した者として佐々木四方志という人物がいたことを改めてここに記しておきたい。

本稿執筆にあたり、阿智村在住の佐々木賢実氏には、佐々木四方志の身内にしかわらない貴重な資料を提供していただいた。また、本稿をまとめるにあたっては、大阪教育大学成實朋子教授に助言と協力を頂いた。改めてここに感謝の意を表したい。

¹ 山田良政兄弟について書かれたものは多く、書籍として出されたものだけでも、以下のようなものがある。
岡井禮子著『孫文を助けた山田良政兄弟を巡る旅』(彩流社、2016年8月)
武井義和著；愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『孫文を支えた日本人：山田良政・純三郎兄弟』(あるむ、2014年3月)
藤田佳久著『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』(中日新聞社、2012年3月)
結束博治著『醇なる日本人：孫文革命と山田良政・純三郎』(プレジデント社、1992年9月)
² 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』(滬友会、1982年5月) pp.76
³ 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書、pp.80
⁴ 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書、pp.80 - 81
⁵ 東亜同文会編『対支回顧録』下巻(原書房、1968

年6月) 凡例
⁶ 庄司得二『南京日本居留民誌』(南京居留民団発行、1940年11月) pp.13
⁷ 矢沢昇・西尾禎『古老は語る』(續文堂出版、1978年12月) pp.250
⁸ 四方志の弟積は、東京府立第一中学校を卒業してから早稲田大学の英文科に入学、その後文芸協会第一期の卒業生として俳優になった。ちょうど松井須磨子と同時期にあたる。
⁹ 村沢武夫『伊那の芸能』(秀文堂、1967年10月) pp.188
¹⁰ 阿智村誌編集委員会『阿智村誌』下巻(信毎書籍印刷会社、1984年3月) pp.737
¹¹ 阿智村在住の佐々木賢実さん談(2015年8月14日 筆者取材)
¹² 阿智村誌編集委員会『阿智村誌』上巻(信毎書籍印刷会社、1984年3月) pp.842
¹³ 会地小学校開校百年記念委員会『会地小学校の百年』(飯田共同印刷、1972年8月)に付された「会地小学校職員の動向と児童数・予算」というリストには、佐々木四表(ママ)志と記されているが、佐々木四方志のことだろう。
¹⁴ 『帝国大学一覽 従明治廿八年至明治廿九年』(帝国大学、1896年2月)に付された明治28(1895)年7月の卒業者の名簿では、3番目に佐々木四方志の名前がある。(pp.428)
¹⁵ 辻直人「明治30年代の文部省留学生選抜と東京帝国大学」(『東京大学大学院教育学研究科紀要』第40巻、2000年)によれば、帝国大学生の官費留学は、明治10、20年代は、東大の教員を補充するための目的が大きく、派遣すべき専門分野まで文部省が指定してきたということであり、この時期成績優秀者が必ずしも即留学が出来るというわけではなかった。
¹⁶ 『陸軍省 - 肆大日記 -M38-7-92』(所蔵館：防衛省防衛研究所)には、陸軍二等軍医佐々木四方志の清国への私費留学許可、及び私費留学生取扱内則により、同人ヨリ財産保証金が収められたとの記載がある。JACAR(アジア歴史資料センター) Ref C07071579900
¹⁷ 東亜同文会編『対支回顧録』(下)上掲書、pp.974
¹⁸ 東亜同文会編『対支回顧録』(下)上掲書、pp.7
¹⁹ 草地浩典『岸田吟香雜録』(津山朝日新聞社、2019年12月) pp.68
²⁰ 東亜同文会編『対支回顧録』(下)上掲書、pp.7~8
²¹ 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記 第二巻』(1968年6月)には、次のように書かれている。「明治32年3月5日(日)である。近衛篤磨邸にて同

- 文会の幹事会が開かれた際に、集まったメンバーに名を連ねている。近衛篤磨日記の中には、「陸実、池辺吉太郎、国友重章、中西正樹、田鍋安之助、佐々木四方志等」が集まった」(pp.288)
- 22 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書、pp.76
- 23 東亜同文会は当初この金陵東文学堂を東本願寺より譲与してもらう計画を立てたが実現することはなかった。(三田良信「南京同文書院設立の経緯」(『同文書院記念報』VOL.18、2010年6月) pp.14～)
- 24 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書 pp.76
- 25 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第二卷 上掲書、pp.443～444
- 26 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第二卷 上掲書、pp.441～442
- 27 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第二卷 上掲書、pp.442～443
- 28 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第二卷 上掲書、pp.459
- 29 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第二卷 上掲書、pp.459
- 30 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第二卷 上掲書、pp.467
- 31 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書、pp.77
- 32 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書、pp.77
- 33 東亜同文会編『対支回顧録』下巻 上掲書 pp.916
- 34 東亜同文会編『対支回顧録』下巻 上掲書 pp.975
- 35 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書、pp.77～78
- 36 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書、pp.77
- 37 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第三卷(鹿島研究所出版会1968年8月) pp.107～108
- 38 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第三卷 上掲書、pp.112
- 39 東亜同文会編『対支回顧録』下巻 上掲書 pp.916
- 40 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書、pp.82
- 41 東亜同文会『続対支回顧録』下巻(1973年8月、原書房) pp.281
- 42 栗田尚弥「20世紀初頭の中国情勢と東亜同文書院一 根津一から大倉邦彦へ」『大倉山論集』54輯(大倉山文化研究所、2008年3月) pp.326～327
- 43 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第三卷 上掲書、pp.283
- 44 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第四卷(1968年10月) pp.351
- 45 『同仁会三十年史』(同仁会、1932年9月) pp.197
- 46 『同仁会三十年史』上掲書、pp.59
- 47 『官報』1922年7月12日
- 48 佐々木四方志の経歴に関しては、日韓併合中の朝鮮での医学教育史を研究している石田純郎氏(岡山医学史研究会)に対して問い合わせたところ、2015年12月29日付でメールで返答を得た。石田純郎氏は、孫・佐々木定氏から情報を得たとのこと。
- 49 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌一』上掲書 pp.82～83